

ルカによる福音書18章「神の国に入る道」

1A 神の国への救い 1-30

1B 祈りによって 1-14

1C 忍耐を尽くす訴え 1-8

2C 憐れみによる義認 9-14

2B へりくだりによって 15-30

1C 子どものような信仰 15-17

2C 裕福な役人 18-23

3C 神にのみできる救い 24-30

2A エルサレムへの道 31-43

1B 預言を介さない弟子たち 31-34

2B 目の開かれた盲人 35-43

本文

ルカによる福音書 18 章を開いてください。私たちは、イエス様が徐々にエルサレムへの旅で、エルサレムに近づいている様子を眺めています。17 章 11 節において、イエス様がガリラヤからサマリアへの境を通られたことが書かれています。そして、らい病人を主が癒されました。

それから、パリサイ人たちが、神の国について尋ねました。「いつ来るのか」という質問です。彼らに対しては、「神の国は、あなたがたの只中にあるのです。」と言われて、それからイエス様は人の子が来られる時のことについて、弟子たちにお語りになりました。今、二つのことが交差して起こっています。ユダヤ人たちがメシヤの到来によって、神の国が今にもできるのではないかという期待感がありました。しかし、それはもちろん、イエス様が十字架に付けられ、復活して、昇天されてからのことです。

ここで二つのことが交差しています。一つは、キリストご自身が十字架につけられるという困難です。もう一つは、終わりの日に主が再臨される時の困難です。主がその時代の人々に拒まれて、十字架に付けられるという困難は、キリストに付く弟子たちも主が再び来られる時代には、困難を受けるという意味で通じるものがあるということです。人の子の日は、ノアの時やロトの時と同じだと主は言われました。その時代はそれぞれ、自分たちのことで生活を満たして、食べたり、飲んだり、結婚したり、神のことを度外視して生きていました。そこに破壊が突如として襲ったのです。同じように、終わりの日も困難な時になります。(2テモテ 3:1-4)

1A 神の国への救い 1-30

そして 18 章は、こうした終わりの日に私たちキリスト者が、どのように生きるべきかをイエス様が

勧めるところから始まります。それは、「いつでも祈るべきであり、失望しない」ことです。

1B 祈りによって 1-14

1C 忍耐を尽くす訴え 1-8

18:1 いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。18:2 「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。18:3 その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください。』と言っていた。18:4 彼は、しばらくは取り合っていないが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、18:5 どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。』と言った。」

イエス様は、不正の裁判官の警えを語られています。聖書には、裁判官に対する厳しい戒めがあり、弱い者たちのために裁き、虐げる者から救い出さなければいけない、神を恐れなさいという戒めが数多く書かれています。けれども、この裁判官はまさに、そういった神の戒めを気にも留めていない不正の裁判官です。

そこにやもめが出て来ています。律法の中で、やもめは貧しい人の例としてしばしば登場します。エリヤの時代には、これから最後のパンを食べて死のうとしていた貧しいやもめと息子が出てきましたし、エリシャの時代には、預言者のともがらの妻が、その夫が死んだので家賃の滞納で取り立て屋に脅されている場面も出てきます(2列王 4:1)。このやもめは、亡き夫の地所によって生計を立てていたのでしょうか、そしてもしかしたら、その土地をだまされて誰かに売られてしまったのかもしれませんが、分かりませんが、やもめがしつこく裁きを行なってくれるように頼んでいました。そして、5 節には「うるさくてしかたがない」と言っていますが、直訳は「私の目の下を打ち叩く」というものです。自分の面子を失うという意味合いのものです。ですから、神を恐れるから訴えを聞いたのではなく、あくまでも自分中心の理由で訴えを聞きました。

18:6 主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。18:7 まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけなくて、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。18:8 あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

ここで大事な言葉は、「まして神は」であります。英語ですと、how much moreという言葉であり、わざと反対の事例を出しているのです。神は訴えを聞かれる方です。けれども、神に選ばれた者たちでさえ、忘れてしまいます。そこでイエス様は、わざわざ反対に、正義の神ではなく、不正の裁判官の例を出して、不正な裁判官であってもやもめの訴えを聞くのだ、ましてやあなたがたの呼び求めを神が、放っておくことはないと言われます。

ところで、私たちは以前、「不正の管理人」の警えを読みましたね。なぜ、その不正を是認するかと疑問に思った人が多かったですが、私はどのような例を出しましたか？石原元都知事の例を、ある韓国の牧師さんの出したことを話しました。石原氏は代議員を引退して、「死ぬまでは言いたいことを言って、やりたいことをやる。人から憎まれて死にたいと思う。」と言ったそうです。そして牧師さんは、「私もこの姿勢を貫きたい。もちろん、石原氏の思想と反対だが。」と言われました。石原氏の主張していることを支持しているのではなく、むしろ彼個人は反対の立場だと思いますが、憎まれてでも信念を貫くという言葉を決意したのです。イエス様は今ここで、同じような語りかけをしているのです。

私たちは、自分が信仰のゆえに困難な所にいる時に、どれだけ正しい神が報いてくださることを信じているでしょうか？神は聞いてくださらない、と思って、そこから離れてしまうことは容易にできます。しかし、不正の裁判官でさえやめめの訴えを聞いているのだ。どうして、正しい神が、ご自分の選ばれた民のために聞かれなれないと言って、不信仰になるのか？ということをおっしゃっています。

「しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」と主は言われます。主が戻ってこられる時まで、忍耐して祈っている人がどれだけいるのでしょうか？と言うことです。サタンがキリスト者に対する攻撃として、その手段の大きな一つは、主が言われたように「失望」でしょう。終わりの日には、「マタイ 24:12 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。」となるとイエス様は警告されました。人々の一般的な愛だけでなく、キリスト者が、初めの愛から離れてしまい、罪の惑わしの中に引きこまれる誘惑が一層のこと強くなります。

ヘブル人への手紙は、激しい迫害によって、キリスト者の集まりから離れていく者たちが出てきた時に書かれたものですが、このように著者は勧めています。「ヘブル 10:23-25 約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」かの日というのは、人の子がやって来る時と同じです。その時まで、失望することなく、天からの幻をいただいてしっかりと、聖霊によって神の愛を心に注いでいただくのです。そして、互いに励ますために集まり、これを怠らないということです。

2C 憐れみによる義認 9-14

ここまでは、人の子が来られるという、神の国の到来についての話でした。この話のきっかけは、17章 20節でのパリサイ人の、「神の国はいつ来るのか」という質問があって、それで弟子たちに神の国の到来について語っておられました。そして 9節からは、その神の国にどのように入るのか、言わば救いについて話されます。イエス様が、ユダヤ人指導者ニコデモに、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ 3:3)」と言われましたが、パリサイ人たちの考えている救いでは、人は神の国に入ることはできないことをこれから教えられます。

18:9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。18:10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。18:11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。18:12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』18:13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』18:14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

当時のユダヤ教の社会で、義人として認められていたパリサイ人と、罪人の典型とみなされていた取税人との対比であります。パリサイ人は、神の律法を守ることによって神の前に義と認められようとしていました。そして取税人は、その律法を守っていないので神の国から外されているとみなされていました。けれども、結果はその反対だったのです。ところでパリサイ人の祈りの中身は、「自分」でいっぱいです。「心の中で」とありますが、それは「彼自身の中で」となっています。つまり、神への祈りではなく、自分自身の中の独り事のようになっています。そして、初めに「神よ」と祈っていますが、その後は、「私は」という主語になっています。神に満たされた祈りではなく、自分に満たされた祈りです。さらに、12 節は神に対しても自慢している様子が伺えます。神は、断食は、年に一度の贖罪日の時だけ命じておられましたが、ここでは「二度断食しています」と言っています。そして、収穫の十分の一を捧げなさいと神は命じておられましたが、彼は受けているものはすべて、十分の一は捧げていました。神の戒め以上に私は行っていますよ、と豪語しているのです。

ここのパリサイ人の姿を見て、いかにも独善的な嫌な人だなと思うかもしれません。けれども、イエス様は「努力して狭い門から入りなさい」とかつて言われたように、普通にしていたらパリサイ派的なのが人間であり、福音を信じて、その中に生きる人は少数なのです。私は、ある学びで一つ質問を聞いている人にしました。

質問: 教会の中で、取り除くべき「パン種」とも呼ぶべき人とはどのような人のことを想像しますか? そして、その理由を述べてください。

- a) 罪の生活を送ってきて、失敗してしまうような人。
- b) 罪に関わるような仕事をしている人。
- c) 自分のしていることを正しいと主張して(確信して)やまない人。

答えは、c)です。イエス様がパリサイ人の教えを、「パン種」といって気をつけなさいと言われましたが、自分のしていることを正しいとみなす、その態度こそが教会を汚します。罪を犯しても、それを真摯に悔い改め、神に立ち直ろうとしている人々こそが神に受け入れられ、その罪の赦しに感謝して、賛美する人々が集まるところ、それが教会です。ゆえに、教会は神の恵みと憐れみに満ち

ています。しかし、私たちは義の基準をパリサイ人のそれに持って行っています。自分が正しくあろうとします。だから、神の前に正しく、また人の前でも正しくなければいけないとして、自分に非があっても自分自身にある罪を見つめようとしません。

しかし取税人は義と認められました。それは、自分が罪人であることを認め、認めただけでなく、神の憐れみを請っているからです。私たちの祈りは、その祈りが聞かれるのは私たちの正しさではなく、もっぱら神の憐れみによることをここで知ることができます。祈りというのは、自分がどれだけ祈ったのかと誇るようには導かれず、かろうじて神に生かしていただいているのだという、神の憐れみによってへりくだらされる類いのものです。そして、義と認められることについて、とても大事なことがあります。その義というのは、神に属するものです。そして、義と認められるというのは神からの贈り物として与えられるものです。自分が正しいことを行なって認められるのではなく、ただ神のみが正しいと認め、この方の前にへりくだり、ひれ伏す時に与えられるものなのです。

2B へりくだりによって 15-30

今、イエス様が語られている時にそこには幼子たちがいました。その幼子たちによって、イエス様は神の国に入るということについて教えられます。

1C 子どものような信仰 15-17

18:15 イエスにさわっていただくとして、人々がその幼子たちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちがそれを見てしかった。18:16 しかしイエスは、幼子たちを呼び寄せて、こう言われた。「子どもたちをわたしのところに來させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。18:17 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。」

ユダヤ人の中では、ユダヤ教の教師、ラビに祈ってもらうことによって祝福を受けるという習慣があります。それで、今、イエスに触っていただくとして親たちが子供たちを連れて来ました。弟子たちがそれを叱っています。おそらく、イエス様を煩わせたくないと思ったからでしょう。けれども、マルコによる福音書によると、イエス様は憤られています。

つまり、イエス様は小さな者たちがご自分のところに来ることをご自分の中で大切にしておられるのに、それを妨げようとしているからです。思い出しますが、カルバリーチャペルが始まって、ヒッピーの若者が教会に押し寄せていた時のことを牧者チャックが話していました。彼らは裸足で動きます。海岸からそのまま来るので、その中に含まれている物質が、絨毯に着くとこびりついて取れないのだそうです。それで朝に、ある人が「裸足禁止」の看板を教会の前に掲げました。チャックは朝早く来ていたので、それを取り外すことができましたが、それで役員会においてこう提議しました。「もし、絨毯を汚すからこの子たちが来ることができないなら、絨毯をすべてはがしましょう。」こうやって、ヒッピーが来ることができるようにしたのです。

これがイエス様の心です。これは、イエス様が子どもに対してどう考えておられるかを知ることのできる大事な御言葉です。もし子供が親といっしょに礼拝に来るのを、親の礼拝の時間にお世話をする、子もりの時間だとしたら大きな間違いです。イエス様は、このような子たちこそご自身のところに来てほしいと願われている、憐れみと小さき者への関心のある方なのです。そして、小さな子に限らず、主のところに来ようとしている人々がそのまま来ることができるというのは、私たちの心が試されます。受け入れる心、それはすなわちイエス様の心です。この心が与えられるように祈らないといけません。

そして、「神の国は、このような者たちのものです。…子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。」というのは、驚くべき言葉だったでしょう。次に、律法を守っている真面目な役人ができますが、この言葉を聞いて反応したに違いありません。小さな子のようにないがしろにされるような存在にならないと、神の国に入れないとイエス様は言われているのです。

ここに、救いの条件のとても大切な要素があります。それは、「権威」と「依頼」です。子供は、親なしには生きていくことができません。自分の努力ではどうしようもない世界の中に生きています。神の国に入ることのできる者の、自分では絶対に御国の中に入ることができないことを知っている者が、入ることができます。つまり、神に絶対的に自分は依存しているのだ、この方にただ振り頼むことだけで生きることができるのだ、と知っている人だけが入ることができます。それから、権威を知っています。子供は、言葉を聞く時にそのまま受け入れる特性を持っています。それは、言葉というのが自分の知性の中でまとめて理解する類いのものではなく、従うものであることを知っているからです。子供を見れば、神に従うことについてその模範を見ることができます。新しく信じたばかりのテサロニケ人について、彼らは神の愛に満たされていた人々でしたが、使徒パウロはこのように彼らをほめました。「1テサロニケ 2:13 こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けるとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。」

2C 裕福な役人 18-23

18:18 またある役人が、イエスに質問して言った。「尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」18:19 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにはだれもありません。」

今の、イエス様の弟子たちに対する受け答えを見て、この役人は感動しました。彼は、神の国に入ることについて「永遠のいのちを受ける」こととして話しています。これは、聖書の中に義人が復活すると永遠の命に至るといふ預言があるからです(ダニエル 12:2)。その命というのは、必ずしも時間的な長さの永遠を表しているわけではありません。永遠の神の命にあずかる、という質的な命

です。時間の制約を受けないところにある命であり、真実な生き方、この時空を超えたところの真実を含んでいます。ですから、小さな子を受け入れるイエス様の中に、その中に永遠の命を見て感動したのでしょう。

彼は、「尊い先生。」と呼んでいます。先生という呼び名は、ユダヤ教のラビに対しては使っていました。しかし、「尊い」という言葉は、ヘブル語であればトブ、良いという意味であり、主のみが良い御方で、善というのは神にしか属さないものであります。ですから、ユダヤ教徒はこの言葉を、人には使わず神にしか使いませんでした。したがって、イエス様が、「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにはだれもありません。」と言われているのです。

ここで、この役人の問題は、人間主義に陥っていることです。これだけの命を持っている人であれば、その人は良い教師だと言っているのですが、人を神の位置に持ってきてはいけないのです。つまり、彼は、イエスが神に属する方であると認めなければいけないのです。ところが、それはできない。このような態度は、数多くの人に見られるものです。クリスチャンの働きを見て、それは素晴らしいという。けれども、神がおられるという可能性を心の中で排除しているのです。彼らがすごいといえます。そうではなく、その人の内におられる神がすごいのです。ですから、この役人もイエスが、神からの方であると認めなければいけないのですが、人の努力によって神に到達できるかのような考えを持っているのです。

18:20 戒めはあなたもよく知っているはずです。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え。』18:21 すると彼は言った。「そのようなことはみな、小さい時から守っております。」

おそらく役人は、もっと高尚な特別な啓示や知恵を求めたのでしょう。イエス様は、モーセによって与えられた神の十戒の基礎を教えられただけでした。そういったことは小さな頃から守っています、と答えているところに、彼の期待外れの思いが込められているような気がします。しかし、これは彼自身が律法についての捉え方が、明らかに間違っていたことを示しています。「ローマ 3:20 なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」律法は神の聖なる性質、正しい性質を表しており、それを私たちが目にする時に、私たちの内にあるものが炙り出されます。律法は、私たちが聖なる神の前でいかに罪深いかを示す鏡なのです。

なぜ、人は自分の努力や功績だけで人生の意味を見出そうとするのでしょうか？それは、まだ自分が霊的に倒産してしまっていることを認めたくないからです。もう自分は罪の中で死んでしまっていることを知らないから、自分を生かそうとします。そして、自分なりの規則や規律を心の中で造り、それを達成すれば意味ある命が得られると思っています。

18:22 イエスはこれを聞いて、その人に言われた。「あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」18:23 すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへんな金持ちだったからである。

他の福音書では、イエス様は彼を慈しんで、このことを言われたことが書かれています(マルコ 10:21)。これが、真面目な人、誠実に生きていこうとしているけれども、イエスご自身に付いていこうとしていない人の特徴です。誠実なのですが、誠実に間違っかけてしまっています。そのような人たちの事をイエス様は可哀想に思われています。

ここのイエス様の言葉で大事なのは、「そのうえで」わたしについて来なさい、と言われたことです。これは、すべての人が全財産を売り払わなければいけない、という話ではありません。イエス様につながるために、今、彼とイエス様の間の妨げになっているものを取り除かなければいけない、という意味で話しておられます。けれども、彼はこの命令に従わずに、非常に悲しんでしまいました。自分の誠実さや信心深さによって救われようとしていた彼は、金銭や財産については自分ではどうしようもできなかったのです。言い換えると、金銭そのものが神になっていました。彼は十戒については、「神のほかに、神々があってはならない。」という初めの戒めを守っていなかったのです。

そして、それが守れないという絶望の中で彼は非常に悲しみました。彼がここでできたことはなんでしょうか？そうです、取税人と同じ罪の告白です。「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」であります。自分が富を神としていたことを悔い改め、神の前でその罪を悲しめばよかったのです。けれども、彼の中には取税人と自分がまさか同じ部類に入るものだとは思ってもいなかったでしょう。そのような罪の認識はできませんでした。

3C 神にのみできる救い 24-30

18:24 イエスは彼を見てこう言われた。「裕福な者が神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。18:25 金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」18:26 これを聞いた人々が言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」18:27 イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」

金持ちが神の国に入れられないというイエス様の教えは、ユダヤ人の中では驚きでした。なぜなら、アブラハムに富を約束されたのは神ですから、その子孫も神に富によって祝福されると思っていたからです。けれども、イエス様も富があるからいけないのだ、ということを書かれているではありません。山上の垂訓で、「富と神の両方に仕えることはできない。」とあるように、富が神の代わりになる、拠り頼むものになるからです。これは金持ちだけの問題ではありません。今の安定した生活が崩されるのではないかという恐れのために、多くの人はキリストのところに来ません。です

から、安定した、それなりの生活をしている人々であれば、すべての人に当てはまる霊的な現実です。

そして、「人にはできないことが、神にはできるのです。」とイエス様は言われました。これが神の国に入る道であります。自分で救いを得るのではなく、神ご自身が救いを与えてくださるのです。金持ちであっても、神の救いを受け入れるのであれば、その富を手放すことができるのです。実に、その良い模範が次の章、ザアカイの話にあります。彼の家に救いが訪れたとイエス様は言われましたが、ザアカイは自分の財産を貧しい人たちに施し、だまし取った者は四倍にして返します、とイエス様に言いました。これはザアカイが救われるために行ったことではなく、イエス様を自分の救い主として受け入れ、信じたから、その悔い改めの心から出てきたものであります。神が行ってくださったから、できたのです。

18:28 すると、ペテロが言った。「ご覧ください。私たちは自分の家を捨てて従ってまいりました。」
18:29 イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、18:30 この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」

ペテロは素直というか、素直に自分たちの献身を威張っていますね。この役人とは異なり、自分たちは自分たちのものを捨てて付いてきていると言っています。そのことについて、イエス様は否定されませんでした。むしろ祝福しておられます。へりくだって、主の前に歩むためにこの世においては損失があったとしても、二つの祝福があります。

一つは、この世においてもその損失を埋めるだけの祝福があるということです。今日、ある女性の救いの証しを見ましたが、彼女は十代の時に数多くの男性と性的関係を持ちました。そして妊娠してしまい、確か 22 歳でシングル・マザーになりました。シングル・マザーに育てられ、それを自分が嫌がっていたのに、自分がそうなってしまったのです。彼女は自分をすべて神に明け渡し、イエス様を信じました。すると、彼女に神を畏れ敬う兄弟が与えられました。彼も結婚まで純潔を守るという決心をしている人でした。それで結婚して、子供もさらに与えられ幸せに暮らしています。ですから、決してこの世で損するだけなのだということではないのです。それから、もう一つは神の国に入る時に与えられる、永遠の命が約束されているということです。

2A エルサレムへの道 31-43

次から、さらにエルサレムへの道の深みへと入ります。サマリヤ地方を通りすぎて、ついにユダヤ地方に入り、エリコを通過します。そこでイエス様は改めて、弟子たちにご自分がこれからどうなるのかを告げておられます。

1B 預言を介さない弟子たち 31-34

18:31 さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。18:32 人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。18:33 彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」18:34 しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。彼らには、このことばは隠されていて、話された事が理解できなかった。

イエス様が、預言者たちが書いてあるすべてのことについて実現するために、十字架への苦しみを経て、よみがえるということをお話しておられます。ところが弟子たちには、これだけの明らかな意味を理解できませんでした。人間には、こうした心理が働きますね。つまり、自分の全く予期しないこと、衝撃的なこと、想定外のことと語られると、その語られたこと自体を受け入れられないという現象です。相手ははっきり、そのままの意味で話しているのに、それ自体を受け入れられないのです。

弟子たちは、先ほどのペテロの発言のように、何もかも捨ててイエス様に付いていきました。けれども、イエスが何を行なわれるのか、どのような方なのかを知ることなくして、ただ自分の献身に任せて従っていました。それで、後にこれらのことが起こる時に、弟子たちはつまずいて、イエス様を見捨ててしまったのです。何もかも捨てて付いてきた、というだけでは、肝心の部分を見失っていました。「イエスが誰なのか？」ということ、「イエスが何を行なわれたのか、あるいは行われるのか。」ということでもあります。私たち信仰者の生活は、とどのつまり「イエス様は何をしておられるのか？」ということを一心に目を離さないで見ていること、そしてその導きに付いていくことです。イエス様は父なる神に、「ヨハネ 17:3 その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」と祈られました。イエスを知ることが永遠の命なのです。そして、使徒ヨハネは第一の手紙の中で、「1ヨハネ 1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目を見たもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて」と言いました。

2B 目の開かれた盲人 35-43

しかし、神の国に入るということについて、またイエスを知ることについて、模範となるような男が現われます。

18:35 イエスがエリコに近づかれたころ、ある盲人が、道ばたにすわり、物ごいをしていた。18:36 群衆が通って行くのを耳にして、これはいったい何事ですか、と尋ねた。18:37 ナザレのイエスがお通りになるのだ、と知らせると、18:38 彼は大声で、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と言った。18:39 彼を黙らせようとして、先頭にいた人々がたしなめたが、盲人は、ますます「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び立てた。18:40 イエスは立ち止まって、彼を

そばに連れて来るように言いつけられた。18:41 彼が近寄って来たので、「わたしに何をしてほしいのか。」と尋ねられると、彼は、「主よ。目が見えるようになることです。」と言った。18:42 イエスが彼に、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを直したのです。」と言われると、18:43 彼はたちどころに目が見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行った。これを見て民はみな神を賛美した。

これまでと同じような、目に見えない人がイエス様から癒しを受けるという内容であります。けれども、ここまではっきりと、神の国の中に入る出来事を見せているものはありません。まず、この盲人は「ダビデの子のイエスさま。」と叫んでいます。ダビデの子は、メシヤ、キリストの呼び名です。ダビデの世継ぎの子が神の国を受け継ぐ王となることを、ダビデに神は約束されていました。つまり、イエス様がはっきりと、来るべきキリストであることを知って、それで叫んでいました。そして、「私をあわれんでください。」と叫んでいます。先ほどの取税人の言葉と同じです。祈りが聞かれるのは、自分の正しさではなく神の憐れみによります。そして、人々がたしなめましたが、彼はますます叫び立てています。先ほどのイエス様の言葉、「子どもたちをわたしのところに来させなさい。」と通じるものがあります。また、最初の「失望しないで祈る」ところにも通じますね。しつこく祈ること、妨げられてもなおのこと叫んで祈りました。

そして、イエス様にはっきりと、「主よ。目が見えるようになることです。」と言っています。彼は、メシヤによって神の国が到来する時に、この方が盲人の目を開かせることをはっきりと知っていたのです。「イザヤ 35:4-6 心騒ぐ者たちに言え。「強くあれ、恐れるな。見よ、あなたがたの神を。復讐が、神の報いが来る。神は来て、あなたがたを救われる。」そのとき、盲人の目は開かれ、耳しいた者の耳はあけられる。そのとき、足なえは鹿のようにとびはね、おしの舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ。」このようにはっきりと、盲人の目が開かれることが預言されています。彼は、神の国をイエスにあってすでに体験し、その中に入ったのです。先ほど、預言者のいったことのすべてを信じていなかった弟子は、この姿を見て、この男がしっかりと預言の言葉を握りしめていたことを知る必要がありました。

そして、彼は神をあがめながら、イエスに付いていきました。それを見ていた民も、神を賛美しています。真正な神の御霊の働きでは、ただ神が行われたとしか考えられない驚きが伴います。この盲人こそが、イエス様が教えられた内容のほぼすべてを含んでいました。私たちは、しつこく祈っているでしょうか？ 困難や妨げに対して、果敢に祈りによって立ち向かっているでしょうか？ そして、自分はもうどうしようもない、何も良い物がないけれども、神よ、憐れんでくださいと言って祈っているでしょうか？ それとも、自分のできる範囲内、自分のやっていることだけで祈る、パリサイ人の祈りのようになっているでしょうか。そして子供のように、素直に、イエスのところに向かっているでしょうか？ それとも、自分の誠実さだけで信仰生活、教会生活を営もうとしてやいないでしょうか？ そして、何よりもイエス様を知りたいと思っていますか？ それとも、何か違うことを求めて熱心になっていますか？ この盲人のように、イエス様に近づきましょう。